監修　佐佐木信綱　新村出　津田左右吉
辻善之助　山田孝雄　和辻哲郎

# 中世歌謠集

浅野建二校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書
「中世歌謠集」　淺野建二校註
昭和二十六年二月二十八日初版發行
昭和三十年九月三十日第二版發行
組版所　株式會社井村印刷所
印刷所　明善印刷株式會社
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・小倉市砂津・名古屋市廣小路）
定價　三〇〇圓

# 目次

## 閑吟集

解説
一、小歌の環境……三
二、書名について……六
三、成立事情……八
四、歌数と題材……九
五、連歌的編纂法……一三
六、諸藝能との關渉……一六
七、諸本とその系統……二一
八、主要な研究書……二四
凡例……三六

本文……四一

中古雜唱集

解說

一、中古の歌謠……一六五
二、成立について……一六七
三、內容と價値……一六九
四、編者……一七一
五、刊本と研究書……一七二

凡例……一八一
本文……一八五
閑吟集補遺……三一三
中古雜唱集補遺……三一八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 閑吟集

淺野建二

# 解　説

## 一、小歌の環境

前期（平安時代）に今様があり、中期（鎌倉時代）に宴曲があり、後期（室町時代）に小歌があり、わが中世歌謠にはおよそ三つの大きな峯が展望される。就中、小歌は、中世的なものから近世的なものへの過渡的所産として、文學史上幾多の問題を内包してゐるやうに思はれる。一般に、中世文學の特質は、これを環境の多様性に歸結し得られるが、さらには貴族性と庶民性、文學性と平俗性とを對立止揚の契機としてその分裂過程を辿ることも可能であつて、この觀點からは、文學描寫の對象として、純粹貴族的の世界及び庶民的世界に對し、庶民精神化された貴族的世界乃至は貴族精神化された庶民的世界といふものが新たに指摘せられ、形態上、平家物語・太平記等の戰記文學、方丈記・徒然草等の遁世文學、十訓抄・お伽草子等の啓蒙文學、連歌・謠曲等の會席文學の如き諸種の新様式が示される。特にその中で注目さるべきは、庶民精神のいちじるしい投影といふ事實である。閑吟集の成立を中心にして考へても、いはゆる「ただ數寄と道心と閑人との三のみ大切の好士なるべく哉」（心敬・老のくりごと）と嘆じられた世相から、この閑人の世界にのみ通用する文藝は、その究極

において、却つてその對蹠をなす文藝、閑なき人をも捲き込み動かす力ある文藝への要求を促さずには置かなかつた。世阿彌や宗祇によつて能樂や連歌がその藝術的完成を告げた時、それと交響する如くに、宗鑑・守武の詼諧をつくした俳諧や、閑吟集・隆達小歌集の如き地上の悶えを訴へる謠ひ物が出現したのは、さうした機運に乘じてのことである。この意味で小歌の詩的感情には他の文藝と一般に、因襲性があり、反復性があり、模倣性があつて、傳統的な文學性といふものを保持しつづけてゐる反面、新興庶民階級のいぶきともいふべき潑剌清新な感覺をいみじくも謳歌してゐる事實を否定することはできない。むしろ閑吟集やお伽草子などに見られる世界は、古典的な美と絡み合ひながらも、その精神の本質においては、古典的中世的要求に對する不滿を持ち、因襲と傳統と式目との堅壘にむかつて反撥的な氣息を含むものであるといはなければならない。しからばその因由はなにであらうか。卑見によれば、應仁の大亂を契機とする文藝荷擔者の一大轉位に他ならないと考へる。亂後一たび荒廢に歸した京師は、平尙格をして「十餘年の間に九重の內外みな燒原となり家々のしるし置きたるものことごとく失せ果てぬ」(武雜記)と嘆かしめる狀態で、一應、傳統文化へのピリオドを點じたものといへる。かくて公家貴族の大部はほとんど所領を失つて、京にゐることすら出來なくなつたので、みづから地方に下ることとなり、ために地方文化はかへつて一層發達した形迹さへ認められるに至つた。ここに武家、庶民といふものが公家貴族に代つて文化の中心となり、ひたすら文藝圈の擴充に當ることとなる。一体、わが國の文學において人間の自覺は鎌倉時代から一層鮮明となるといはれるが、その人間自覺の伸展が獲得し

たものは、中世的な神佛の世界ではなくして感性の世界であり、感情の世界であつた。したがつて、謠ひ物の史的展開においても、單に因襲的に、「長くてくせづきたる」（枕草子）今様の系統を引く宴曲が、ただ言語や事物の緣にすがつてさまざまの概念をならべ、いはば詞の行列として抒情的要素に乏しい形式を長大にするやりかたは、やうやく時代の感情から離れるに至つた。そこに登場したのが「早歌うたひ」と稱する門附の徒である。室町時代にはこの遊藝者群によつて、零落した宴曲の一節がわづかにうたはれてゐた。それはちやうど長い謠曲の一節を小謠としてうたはれることが多かつたのと同じであるが、宴曲の場合には、その一曲のうちの極くわづかな部分、二三句を拔いてうたつたに過ぎない。閑吟集に見られる「花見の御幸と聞えしは保安第五の如月」などがそれである。室町時代にはさうした形式の短小な歌謠――小歌――が新たにうたひ出され、やうやく當代歌謠圈の中心的地歩を占めるに至つた。小歌には種々の要素があり、その形式の上から見ても、今様形式の半分のもの、短歌形式のもの、朗詠まがひのものなど、平安時代の雜藝に比べると極めて變格な詩形が多く、特に一定した中心形式といふものが存在しない。その曲節においては、世阿彌の遺著のなかに「近代曲舞を和らげて小歌節をまじへて謠へばことに殊に面白きなり」（音曲聲出口傳）とか、「但し、當世、小歌節曲舞（くせまひ）とてただ謠の懸りにて曲舞になること多く聞ゆるなり、これはなびやかに幽玄の懸りなり」（曲附書）など見えて、曲舞とともに猿樂音曲構成上の不可缺的要素とされてゐたことが知られる。すなはち曲舞が專ら節（リズム）奏の面白さを眼目とするに対し、音曲の旋律美（メロディ）、詞章の內容美をさながらに表出するために、小歌節なる優麗

な謠ひぶりが謠曲のなかに攝取されたのであつて、曲舞的なものと小歌的なものとの完全な同化がとげられたのは、觀阿彌の時代であるといはれる。また、小歌が一節切尺八によつて伴奏されたこと、その傳へられる詞章の內容が比較的快活なものがすくないこと、したがつて、その律調が未だ近世調としての輕快さに達しきらないことなどから綜合して、その大部分の旋律は、今日の輕快さとは大部距離のあつたものであらうと想像される。その他、今日能狂言の小歌として傳へられるものによつても、およそは察することが出來る。能狂言の間や、また獨立して狂言師によつて歌はれる小歌には、室町時代の遺響を傳へるものがあると思はれる。これらの室町時代の小歌は、閑吟集の他に狂言小歌集、室町時代小歌集の二書によつて多くの歌詞を知ることができ、また斷片的に諸書に出てゐるものもある。そのうちで中國で書かれた日本風土記に室町時代の小歌の記載されてゐるのは、珍らしいといはなければならない。

## 二、書名について

管見によれば、閑吟集の名稱は、江戸時代の書籍目錄には全く存しなかつた。その初見と思はれるものも、たまたま文化から弘化年間にかけて編まれた小山田與淸の松屋筆記の中に、二箇所だけ引用されてゐる程度に過ぎない。すなはち同書卷六十六「若衆」の條下には、本集二一五の小歌、同卷百「ちろり」の條下には、本集四九の小歌が、閑吟集出自のものとして例示されてゐる。明治時代に入つて新たに本集の價値が發見され、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その全容をはじめて世に紹介されたのは高野辰之博士であつて、明治三十九年八月の帝國文學誌上に寄せられた「室町時代の小歌」といふ論文がその嚆矢である。爾來幾多の學者の關心と愛撫とがこの小文學の上に注がれた。

書名の由來については、眞名序に「編三百餘首謳歌一名曰閑唫集」とあり、假名序に「都鄙遠境の花の下……田樂、近江大和節になり行く數々を、忘れ形身にもと、思ひ出づるにしたがひて、閑居の座右に記し置く、これを吟じうつり行くうち、浮世の事業にふるる心の邪なければ、毛詩三百餘篇になぞらへ、數を同じくして閑吟集と銘す」と明記されてゐるので、なんら異論の餘地はないが、本來「閑吟」なる語は、漢詩文出自のものとして、「閑嘲閑吟歇又行」(東歸集)、「室內閑吟一盞燈」(狂雲集下)の如く、心しづかに詩歌を吟詠する意に用ゐられた。ことに「閑」の字は、清輔の奧儀抄に「ミヤビ」、禪竹の五音次第に「ミヤビシヅカ」と訓まれ、蠡測集に「イタヅラ」乃至は「イタヅラニ何モセイデイタル者ハシヅカナル近キゾ」と釋せられる如く、藝術の底に流れ、藝術を生む母胎となる一種の消極的情趣の世界を標榜した語と解せられる。それは靜かに滋味を味はふ閑寂とか、隱微とか、諦念とか、あはれとか、慰みといふ世界に近いもので、ひろく中世文藝事象の基調をいろどるものといふべく、その意味からは、この題號を銘する編者に、未だ知的貴族趣味の傾向が濃厚に殘存してゐるやうに思はれる。

## 三、成立事情

この集の成立事情は、眞名・假名の兩序に明らかである。それによると、富士の遠望をたよりに庵を結んで、松吹く風に琴、尺八を友としてゐた桑門の隱士が、花のもと、月の前と交遊した往時を回顧しながら、懷舊の念から忘れがたみにもと記して行つた歌謠の集錄である。しかも眞名序には、「永正戊寅穐八月、靑灯夜雨之窓、述而作」とあるので、その成立が永正十五年（紀元二一七八年・西紀一五一八年）八月であることが知られる。永正十五年といへば後柏原天皇の御代、將軍足利義稙の時代で、室町も末期に近く、かの戰國の英雄信長・秀吉の世に出る約二十年前にあたる。したがつてこの集によつて、室町末期の歌謠のほぼ全貌が明かに知られるといふものである。

編者に關しては、眞名序に一狂客と號するだけで一切不明であるが、一說には宇津の山泉谷に住んでゐた連歌師柴屋軒宗長ではなからうかとの推定も試みられてゐる。しかし、宗長說にも、種々の點から見てなほ疑問の點がすくなくないので、いまのところ當時の隱逸といふ推定にとどめ、それ以上の臆斷はさしひかへる方がむしろ穩當のやうに思はれる。當時は、いはゆる遁世ものとて、戰亂後の京師を避けて、氣候風土良好な東海地方に閑居する者が多く、いづれも僧形に身をやつして自尉的な餘生を送つてゐたもののやうであるから、本集の編者なども、あるいはさうした境涯の一隱士であつたかも知れない。ともあれ、この集と餘り遠からぬ時

代に編まれたと推定される室町時代小歌集の序に、「ここに桑門の扉を閉ぢて獨り酒を樂しみ、小歌を謠ひつつ貴きにも交はり賤しきにも睦び、老たるをも友なひ若きにもなつかしうせられたる沙彌宗安といふあり、古き新しき小歌に節々を附けて、河竹の世々の玩びとぞなし侍る」とあるやうな編者と、對照して考へらるべきものであらう。

つぎに兩序の成立については、この二つの序文は、同時に出來たものか、それとも別々に出來たものか、疑へば疑ふ餘地も存する。しかし、現在傳はる寫本では、兩序の備はつてゐるのが正統視され、內容にもほとんど異同のない點から考へて、ほぼ同時に成立したものと見てよからうと思はれる。勿論、兩序の體裁は古今集以來の勅撰和歌集を範例として、それに擬したものに相違なからうが、古今集の眞名序が假名序の飜譯であつて、後に附けられたものだといふ說があるのに對して、本集の場合は、眞名序の方にはるかに重點を置かれた筆致で、假名序はむしろその後に作られたのではなからうかと思はれる點が多い。

## 四、歌數と題材

序に、「毛詩三百餘篇になずらへ數を同じくして」といつてゐるやうに、この集の歌は總數三百十一首から成り立つてゐる。これを四季、戀に分類してその數を求めると、春五十六首、夏三十五首、秋百二十六首、冬六十三首、戀三十一首となる。しかし、この計數は必ずしも正確ではない。なぜならば、四季のうちに加はつ

てゐる戀は、季節を含んだものもあるが、一方には無季のものもあつて、細別すれば相違を生ずるからである。したがつて、部類を改變すれば、つぎのやうな計數も得られる。祝言四首、諷刺六首、雜二十九首、述懷三十五首、自然三十五首、戀二〇二首。これは、季別を問題にせず、扱はれた題材を主として考察して區別したものであるが、これによつて、當時の人の志向がいかなるものであるかもほぼ察せられる。まづ戀の歌であるが、總歌數の三分の二を占め、他との均衡が取れぬほどに優勢である。これは、抒情を中心とする小歌として見れば、當然の現象のやうでもあるが、また遊宴歌謠といふ性格からも首肯される。一般に遊宴の席上にあつて愛誦されるものは、なんといつても戀愛詩である。それは、われわれの生活感情のなかで最も普遍性を有するものとして、饗宴に列する一座の人々の興奮を高潮させるのにもつとも自然な媒介と考へられる。この集の戀愛詩もさまざまな位相を示し、忍ぶ戀を歌つては、「葛城山に咲く花候よ、あれをよと餘所に思うた念ばかり」、「わが戀は水に燃え立つ螢〳〵、ものいはで笑止の螢」、「申したやなう〳〵、身が身であらうには申したやなう」といふが、のちの近世歌謠に比べると、なほ優雅の趣きをたたへてゐる。これに對して、「よしやつらかれ中々に、人の情は身の仇よなう」、「葛の葉〳〵、うき人は葛の葉のうらみながら戀しや」、「恨みになにはに多けれど、身は和御寮を惡しけれとさらに思はず」などはうらむ戀の歌と見るべく、「身は浮き草の根も定まらぬ人を待つ、正體なやなう、寢うやれ月の傾く」、「情なき人を松浦の沖に、唐土船の浮き寢よなう」、「人を松蟲枕にすだけど、淋しさのまさる秋の夜すがら」の如きは待つ戀、さらに、「吉野川の花筏、浮かれてこが

れ候よの〳〵」、「雲とも煙とも見定めもせで、うはの空なる富士の根にや」、「鹽屋の煙々よ、立つ姿までしほがまし」、「なにとなる身のはてやらん、潮に寄り候片し貝」、「靡の中へ身を投げばやと、思へど底の蛇が怖い」の如きは、隨分と洗煉された歌に相違なく、それぞれ愛情の歌として、民衆の健やかな生活感情を直接的に表現してゐる。述懐は、およそ二つの傾向に分かれてゐるやうである。すなはち一つは「戀しの昔や、たちも返らぬ老の波、いただく雪の眞白髪の、長き命ぞ恨みたる、〳〵」の田樂歌謠によつて代表される老後懷舊の回想であり、一つは境涯の變化に對する觀想である。特に注意されるのは後者の場合であつて、この集のうちには、「世のなかはちろりに過ぎる、ちろり〳〵」、「何ともなやなう〳〵、浮き世は風波の一葉よ」、「ただ人は情あれ、夢の〳〵〳〵、昨日は今日の古へ、今日は明日の昔」、「思へば露の身よ、いつまでの夕なるらむ」の如く、世を、身を、かく觀ずるといつたやうな、いはば一種の人生觀詩、世界觀詩に類するものが隨所に見られる。それも、一條兼良が應仁の亂の最中に書いた藤河の記の冒頭に「胡蝶の夢の中に百年の樂しみを貪り、蝸牛の角の上に二國の諍ひを論ず、善しといひ惡しといひ、ただかりそめのことぞかし、とにつけかくにつけて、一心を惱ますこそ愚かなれ」と述べてゐるやうな、高踏主義、隱遁主義に踏みとどまることなく、「くすむ人は見られぬ、夢の〳〵〳〵世を、現顏(うつつ)して」、「なにせうぞくすんで、一期は夢よ、ただ狂へ」、「よし名の立たば立て、身は限りあり、いつまでぞ」、「われは讃岐のつるわの者、阿波の若衆に膚觸れて、足よや腹よや、つるわのことも思はぬ」の如き、現實主義、享樂主義の一面にまで進んでゐる。この微妙な心の陰影

がさらに發展しては、隆達小歌の、「夢のうき世の、露の命の、わざくれ、なり次第よの、身はなり次第よの」の如きものとなるのである。

自然現象を客觀的に歌つた叙景詩としては、三十五首ほど算へられる。和歌集に自然詠が多いのに比較して、この集にはそれがはなはだすくないといふのも、元來が讀むために作られた文藝ではなくて、いはゆる口承を目的とした文藝であるためで、自然、感情の表白が中心となる結果と考へられる。その大部は、用語なども先行文藝に典據を置いたもので、歌枕、序、掛詞等が豐かに驅使され、「菜を摘まば、澤に根芹や、峯に虎杖、鹿の立ち隱れ」、「霞分けつつ小松引けば、鶯野邊に聞く初音」、「薫き物の木枯の、洩り出づる小簾の扉は、月さへ匂ふ夕暮」の如く、全く王朝文學の雰圍氣的な趣味化された生活感情への共感から成るものである。最後に、この集に見られる題材の一特色として、時代色濃やかな諸景物を指摘したい。上述の如き、愛情、哀愁、懊惱、諦忍の精神美の表現以外に、本集の歌謠のなかには、「あら美しの塗壺笠や、これこそ河内陣土産、えいとろえいとえいとろえとな」をはじめとして、宇治の川瀨の水車・淀舟・近江舟・人買船・尖り笠・駄賃馬など室町文化の斷面に取材したものが多く見られる。それらは、民謠的律調をもつた室町風物詩として、貴重な文化史資料を提供するものと云へよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.